

NEWSLETTER

No.26

2011年11月1日

会長 山梨正明 事務局 〒606-8585 京都市左京区松ヶ崎御所海道町

京都工芸繊維大学 基盤科学系言語・文化部門 田中廣明 研究室

psj.secretary_at_gmail.com <http://www.pragmatics.gr.jp>(旧<http://www.soc.nii.ac.jp/psj4/>)

郵便振替口座 00900-3-130378 口座名:日本語用論学会

ゆうちょ銀行 支店名:009 当座口座番号:130378 口座名:日本語用論学会

三井住友銀行 学園前支店 普通預金 店番号546 口座番号3755278 日本語用論学会 高木佐知子

★ 会員の皆様、いかがお過ごしでしょうか。語用論学会ニューズレター第26号をお届けします。

本号は、さる10月2日に第48回運営委員会が開催されました。本号は、その内容をもとに編集されています。重要なお知らせとして、**第14回大会のお知らせ、大会論文集(Proceedings)のCD-ROM化とネット化、『語用論研究』のオンライン投稿の採用、ミニ・ワークショップ、談話会のお知らせ**などがあります。

★ 日本語用論学会第14回大会

2011年度の第14回大会は、以下のとおり開催されます。なお、東日本大震災の影響を考慮して、当初予定していた慶應義塾大学から京都外国語大学に会場を変更して行うことといたしました。また、今年度大会は、**3.11の東北大震災に鑑み、「災害とコミュニケーション」というテーマで言語系の学会としては始めて特別シンポジウムを行います。**どなたでもご参加できるようにフリー(無料)にしています。

■2011年12月3日(土)~4日(日)

■京都外国語大学 1号館

〒615-8558 京都市右京区西院笠目町6

TEL 075-322-6012 (大代表)

大学HP: <http://www.kufs.ac.jp/>

アクセス:

<http://www.kufs.ac.jp/aboutkufs/campus/access/index.html>

(1) 阪急電車「西院駅」から、西へ徒歩約15分
または、「西大路四条(西院)」から市バス3・8・28・29・67・69・71に乗り、「京都外大前」で下車(乗車時間約5分)

(2) JR「京都駅」

丸鳥口から:市バス28に乗り、「京都外大前」で下車(乗車時間約30分)または、京都バス81・83に乗り、「京都外大前」で下車(乗車時間約30分)
八条口から:市バス71に乗り、「京都外大前」で下車(乗車時間約30分)

(3) 地下鉄東西線「太秦天神川駅」から、南へ徒歩約13分

12月3日(土) 午前中フリー(どなたでもご参加いただけます)

・特別シンポジウム:午前10:00~12:00 [1号館151教室]

テーマ:「災害とコミュニケーション」

司会:森山卓郎(京都教育大学)

1) 言葉は失われたのかー「語る」ということをどう考えるかー

講師:名嶋義直(東北大学)

2) 情報工学から情報の信憑性の判断をどう考えるか

講師:河原大輔(京都大学)

3) 社会心理学から災害情報をどうつたえるか

講師:吉川肇子(慶應義塾大学)

受付は12:20より開始します。参加費:2,000円

(会員)、3,000円(非会員)(昨年度のProceedings

代、Abstract集代などを含む)。会費(現会員、

新入会員)一般:5,000円、学生:4,000円、団体:

6,000円。当日会員(参加費のみ)。

午後:総会(1:05~1:30)、研究発表(英語発表/日本語発表)(1:35~4:00)、ワークショップ(1:35~3:15)

・大会講演（招待講演）：午後4:20～6:20
 (Plenary Lecture) [1号館 151教室]

Chair: Ryoko Suzuki (Keio University) (鈴木亮子
 (慶應義塾大学))

Lecturer: John W. Du Bois (University of
 California, Santa Barbara)

Empathy for syntax

ABSTRACT: Is it possible to have empathy for syntax? The idea doesn't seem promising. We seem to be mixing two different things, if we try to combine an emotion (or affective orientation) with a grammatical apparatus. The widespread conceptualization of grammar as a machine doesn't seem to leave much room for any emotion, least of all empathy. Some cracks in the generative position have appeared, however, notably in Susumu Kuno's important early suggestions about empathy in syntax, which at least hints that there could be something going on between these two.

But I want to go further, to ask: Is it necessary to have empathy for syntax? That is, do speakers actually need to draw on the human capacity for empathy in order to be able to do syntax, in the particular ways that humans do it? I will look at some of the complex and subtle syntactic structures and strategies that speakers create as they perform syntax in everyday life, when they are left to their own goals and devices, asking what role empathy might play, if any. I explore the question of empathy as a grounding for syntactic production in light of two theories which I have been developing in recent years: dialogic syntax and stance. Based on these theories and the empirical evidence they allow us to identify, I will suggest that there are actually quite powerful forces that link empathy and syntax. I will address the relation between the emergence of emotion in interaction and the ways that participants construct the sociocognitive relations of intersubjectivity via dialogic resonance and stance alignment. If time allows, I will bring in some recent joint work (with Peter Hobson and Jessica Hobson) on the discourse of children with autism, in which problems in establishing intersubjective relations seem to underlie atypical patterns of syntactic production. As a report on work in progress, this presentation will surely raise more questions than it answers; the goal is rather to open a discussion of the possibility that empathy plays a critical role in grounding the process of making language together, with special implications for syntax.

懇親会（午後6:30より）4,000円(参加希望者は受付で大会参加費と伴にお支払いください。)

・会場：11号館2階ラウンジ

12月4日（日）午前10時より

研究発表（英語発表／日本語発表）（10:00～12:25）ポスター発表（12:25～2:25）

・シンポジウム：午後2:30～5:00

[1号館 151教室] 英語発表

Aspects of Meaning in Discourse: Towards Interdisciplinary Pragmatic Research

Chair : Lawrence Schourup (Osaka Prefecture University)

Designated Discussant : John W. Du Bois (University of California, Santa Barbara)

1) Embodied action in interaction: A conversation analytic approach to action-formation

Aug Nishizaka (Meiji Gakuin University) (西阪仰 (明治学院大学))

2) "Trading places" and intersubjective understanding of spatial perspectives

Kuniyoshi Kataoka (Aichi University) (片岡邦好 (愛知大学))

3) Utterances in real time: Where interaction and cognition meet

Yasuharu Den (Chiba University) (伝康晴 (千葉大学))

研究発表とワークショップの詳細、また各発表の抽象トピックについてはプログラムと学会HPをご覧ください。

書店展示（研究社、ひつじ書房、開拓社、くろしお出版など）もあります。

★【受付について】以下の1～3の受付を行います。本年度も員番号による受付をいたします。Newsletterの宛名シールに会員番号を明記しています。その番号をお持ちください。

【参加費（大会資料代：昨年の大会論文集 (proceedings) と大会short abstract集) と会費納入】

1. 大会参加費：会員：2,000円、非会員：3,000円（大会参加者全員から）
2. 学会費：一般会員5,000円、学生会員：4,000円、団体会員：6,000円（会員から、新入会員も同）
3. 懇親会：4,000円

受付は3日12:20から、4日は9:30から行います。開会直前、研究発表開始直前が一番混雑しますので、お早めにお越し下さい。なお、昨年度から、受付で学会費（未納の方）の受付も行いますので、ご準備ください。

【当日の昼食】なお、お弁当は手配しておりま

せんので、学外へ食事に出られるか各自ご持参ください。当日配布のランチマップをご覧ください。

【ホテルの紹介】学会ではホテルの紹介はいたしていません。各自でご手配していただきたく思います。なお、京都市内は12月の第1週くらいまで秋の紅葉観光シーズンで、今からではホテルの空きはほとんどありません。大阪（京都まで30～40分）、滋賀県の大津市（京都まで20分）をご予約ください。

《事務局より》

★ホームページの移転について

現在は、国立情報学研究所の学協会情報発信サービスによるホームページは開設していません。2011年5月より日本語用論学会のウェブサイトを開設いたしました。新しいURLは以下の通りです。www.pragmatics.gr.jp

最新の情報についてはホームページをぜひご覧下さい。

★大会プロシーディングズについて

これまでプロシーディングズは冊子（紙媒体）で配布しておりましたが、今年度からは、特に希望がなければCD-ROMでの配布といたします。冊子（紙媒体）を希望される方は、事前にメールか郵便で学会に紙媒体を希望する旨を伝えて下さい。CD-ROMと紙媒体の両方を希望する場合も同じようにお知らせ下さい。両方希望される場合は、当日追加料金1,000円を申し受けますので、ご了承下さいませ。

●メールでのご予約の場合

メールタイトルを「紙媒体での論文集希望」として、メール本文に、お名前、御所属を記し、order@pragmatics.gr.jpまでご連絡ください。

●郵便ハガキでのご予約の場合

お名前、御所属と「紙媒体での論文集希望」の旨を記して、〒615-8558 京都府 京都市右京区西院笠目町6 京都外国語大学 英米語学科 野澤元宛にご連絡ください。

★『年次大会発表論文集（大会プロシーディングズ）』の電子アーカイブ化と公開に伴う著作権行使の許諾に関するお願い

日本語用論学会では、『年次大会発表論文集（大会プロシーディングズ）』につきまして、創刊号から最新号（直近3年間の号を除く）までの全巻号に掲載された論文に対し、電子アーカイブ化を行い、インターネットを通じて無償公開する計画を進めております。直近3年以降の

号については、毎年、1年分ずつ、順次公開を進めていく予定です。

過去文献の電子アーカイブ化、ならびにインターネットを通じての公開は、会員の研究の便宜を図るのみならず、文化・社会的にも意義のあることから、本学会運営委員会では、積極的に推進していきたいと考えております。

そこで、本学会では、論文の著作権の帰属を明らかにするために、各論文の著者（著作権者）のみなさまに対し、著作権法第21条～28条に規定された権利の一部を本学会、および電子アーカイブ化・オンライン化の作業を行なう、本学会が作業を委託する第三者が行行使することへの許諾をお願いしたいと考えております。

具体的には次の2項目について著者のみなさまの許諾をいただきたいと考えております。

1) 日本語用論学会は、学術目的のために『年次大会発表論文集』の論文の全部、またはその一部を複製する権利（著作権法第21条「複製権」）、および公衆送信する権利（同23条「公衆送信権」）を行使することができる。

2) 日本語用論学会は、学術目的のために本学会が作業を委託する第三者に上記1と同様の権利を行使させることができる。

以上のように、該当する掲載論文の著者のみなさまに対し、著作権の一部を行使することについて、許諾手続きを進めたいと考えております。

本学会会員のみなさまには、本学会ホームページ上での告知、ならびに、本学会が発行する『NEWSLETTER』に掲載する文書によって、許諾手続きを進めさせていただきたく存じます。

上記2項目（著作権法第21条の複製権、第23条の公衆送信権）の本学会、ならびに第三者の行使についてご了承いただけない場合、または異議がある場合には、2012年3月31日（申告期限）までに、本学会事務局までご連絡をいただきますようお願い申し上げます。

誠に勝手ではございますが、申告期限までに本学会事務局へお申し出がない場合は、上記の告知をもって、ご了承を得られたものとして処理させていただきます。また、申告期限後に、著者のみなさまからのお申し出があった場合には、速やかにお申し出の趣旨にしたがい、可能な限り公開の停止などの処置をさせていただきます。本件の連絡先

日本語用論学会事務局 〒606-8585 京都市左京区松ヶ崎御所海道町 京都工芸繊維大学基盤科学系言語・文化部門 田中 廣明研究室内
secretary@pragmatics.gr.jp

★ 会費の振り込みについて

会費の振り込みにつきましては、未納の方は同封の振替用紙で11月末までにお払い下さい。振替用紙と昨年度分、今年度分の納入状況の用紙が同封されております。学会の会計をご理解の上、未納の分も併せてお払い下さい。行き違いがある場合は、ご容赦下さいますようお願い申し上げます。会費の未納が2年以上になりますと、会員の資格を失うことになっておりますのでご注意ください。なお、今年度は、学会当日にも学会費の支払いを受け付けます。新入会員の方も大会の際に受け付けます。年会費は、一般会員：5,000 円、学生会員：4,000 円、団体会員：6,000 円です。振込先は以下の通りです。

1. 同封の振替用紙で支払う場合：郵便振替口座：00900-3-130378（ゆうちょ銀行）口座名：日本語用論学会
2. 他銀行のATM から振り込む場合：ゆうちょ銀行支店名：099 当座口座番号：130378 口座名：日本語用論学会（ただし、振り込み手数料がかかります。ゆうちょ銀行のATM から振り込みが可能です）

1 はこれまで通りですが、2 の支払い方法も可能となりました。ご活用ください。ただし、特に2 の場合は、事務局会計には、カタカナのお名前しか通知されません。お手数ですが、振り込みと同時に、事務局会計（高木佐知子（大阪府立大学）：psj.treasurer_at_gmail.com）とCcで事務局補佐（野澤元（京都外国語大学）：psj.assistant_at_gmail.com）にお払いの年度とお名前、会員番号、所属、住所（また、所属、住所に変更がある場合も同様）をメールでお知らせいただければ幸いです。なお、国外からの振り込みには、

http://www.jp-bank.japanpost.jp/kojin/tukau/kaigai/sookin/kj_tk_kg_sk_gaikoku.html

（日本語版）

http://www.jp-bank.japanpost.jp/en/djp/en_djp_index.html（英語版）

をご使用ください。

★12月2日（金）：ミニ・ワークショップと Du Bois 先生の講演会のお知らせ

大会に先立ち、京都工芸繊維大学で以下の要領で、ミニ・ワークショップと Du Bois 先生の講演会を行います。ふるってご参加ください。参加費無料

日程と開催場所

2011年12月2日（金）

1. 午後 1:00～2:30 ミニ・ワークショップ「自

然発話の文法」（発表言語：英語）（発表者未定）
Discussant: John Du Bois 先生

2. 午後 3:00～4:30 John W. Du Bois 先生（UCSB）講演会 *Corpus construction as discourse representation*（1 は日本語用論学会後援、2 は主催）

場所：京都工芸繊維大学（松ヶ崎キャンパス）
60周年記念会館 1階大講義室

<http://www.kit.ac.jp/>

交通案内 京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス

http://www.kit.ac.jp/01/01_110000.html

京都駅より 市営地下鉄烏丸線「国際会館」行きに乗車(約18分)「松ヶ崎駅」下車、徒歩約8分(「松ヶ崎駅」の「出口1」から右(東)へ約400m、四つ目の信号を右(南)へ約180m)

テーマと趣旨

テーマ：自然発話の文法

趣旨：近年、言語研究を実際の話し言葉データを用いて行うことの意義が多く研究者によって提唱され、日本国内の言語学者の間でもその認識は広まりつつあります。情報機器が発展した今日においては、個人の研究者が話し言葉データを収集することは、それほど難しいことではありません。また、一般に利用可能な話し言葉コーパスの構築も、少しずつではありますが行われてきています。しかし、話し言葉データに対して、どのように分析を行っていけばよいのか、どうすれば研究としてまとまるのか、話し言葉データを使うメリットがどの程度あるのか、といった点については、十分に知見が整理されているとは言い難い状況です。そのため、話し言葉データを利用する研究者は決して多いとは言えず、また、新たにこのアプローチの研究を実践するのは容易くありません。

今回のミニワークショップと講演会は、話し言葉データ用いた研究の実践方法に関して意見交換および情報共有を行い、今後の日本国内でのこのアプローチの発展を促す契機とすることを目的として企画されました。当日は、話し言葉を用いた言語研究の第一人者である John Du Bois 教授をディスカッサントに迎え、有志2名ないし3名による実践例の紹介とディスカッションを行います。使用言語は英語です。

ミニ・ワークショップ、講演会参加者募集
連絡先：htanaka_at_kit.ac.jp（京都工芸繊維大学・田中廣明）

★《西山佑司先生・John van der Auwera 先生談話会のお知らせ》

3月下旬か4月上旬に談話会を開催いたします。場所と日時は確定し次第、ウェブサイトと mailing list などでお知らせします。

講師: 西山佑司先生 (明海大学)

属性表現と語用論的解釈: 語用論はどこまで意味論から自由であるか

アブストラクト: 人は、文を発話することで、その文の意味よりはるかに豊かな思考を伝達することができる。発話として使用された言語表現自体の意味は、話し手の思考という観点からすればきわめて不完全で断片的である。それにもかかわらず、聞き手は話し手の意図した豊かな思考(話し手の意味)を瞬時に把握できる。これは一体なぜであろうか。妥当な語用理論は、それがいかなる立場であれ、この問いに答えることができなければならない。関連性理論によれば、聞き手は、推意 (implicature) を把握するときはもちろん、表意 (explicature) を把握するときにも、関連性の原理に従った推論を駆使しているとされる。関連性理論の最近の研究は、表意の導出にかかわる語用論的プロセスとして、(i) 曖昧性除去 (disambiguation)、(ii) 飽和化 (saturation)、(iii) アド・ホック概念形成 (ad hoc concept construction)、(iv) 自由拡充 (free enrichment) の4つのタイプを区別する。この発表では、まず、これら4つのプロセスを「言語的制約のもとにあるか否か」という観点から整理し、とりわけ自由拡充が、他の3つのプロセスとは本質的に異なる「純粋に語用論的なプロセス」であることを確認する。自由拡充とは、例えば、女の子がトラックにひかれた現場で(1)が発話されたとき、それを括弧のなかの要素を付加して解釈するプロセスである。この要素の復元の引き金となるものは文の論理形式には一切なく、純粋に語用論的なものではない。

(1) [女の子をひいた]トラックの運転手が逃げた。では、自由拡充は言語的制約から完全に自由かというところではない。例えば、(2)の発話を括弧のなかの要素を付加して解釈することは不可能である。

(2) あの男は、[*女の子をひいた]トラックの運転手ではない。

(2)では「トラックの運転手」が属性を表す叙述名詞句として機能しているからである。そこから西山&峯島(2006)、Nishiyama & Mineshima (2010) は(3)の仮説をたてた。

(3) 自由拡充は叙述名詞句の解釈において阻止される。

この仮説は、自由拡充の適用可能性に対して意味論的な制約が存在することを述べている。では、なぜこのような制約があるのだろうか。この発表では、「対象を指示する機能」と「属性を表わす機能」という意味機能上の区別が語用論的プロセスの適用可能性に決定的に効いてくるという点に着目してこの問題を検討する。この検討を通して、「語用論はどこまで意味論から自由であるか」という問題を考えてみたい。

講師: Johan van der Auwera 先生(Antwerp 大学、ベル

ギー) タイトル: 未定

《『語用論研究』編集委員会より》

★『語用論研究』第13号の応募状況・審査状況について

研究論文、研究ノート、研究ディスカッションを合わせて、14件の応募がありました。書評については応募はありませんでした。研究論文では4件に修正の上での再提出を求め、うち2件は研究ノートとしての再提出を求めています。また、研究ノートでは1件に修正の上での再提出を求めました。その結果、現在のところ研究論文で1件、研究ノートで1件を掲載する予定であるが、研究論文で再提出の締め切りを延長したものが他にもう1件あります。

その他には、Traugott 先生の講演と、Coulthard 先生の講演、また、元運営委員の児玉先生に懇話でお願いしたディスカッションを掲載する予定になっています。

★『語用論研究』への投稿の募集

【編集委員会からのお知らせ】

学会誌『語用論研究』では、会員の皆様の投稿をお待ちしています。投稿は随時受け付けておりますが、査読のため3月末日を一応の区切りとしています。尚、第11号からは、日本語と英語のどちらかの言語による応募となっています。投稿規定については、学会 HP の投稿規定をご覧ください。

『語用論研究』へのオンライン投稿の開始について

現在、『語用論研究』は、郵送と電子メールにより投稿を受け付けていますが、>2012年度の『語用論研究』(第14号)より、オンライン(EasyChair)での投稿を開始することになりました。これに伴い、郵送での投稿方法は廃止となります。

投稿に際しましては、応募原稿の受理等の確認と連絡をより確実にするために、出来るだけオンラインでの投稿をお願いします。また、メールによる投稿者に対して、後日、オンラインでの再投稿をお願いすることもありますのでご了承ください。>

後日、学会ホームページ上の投稿規定のページを更新いたしますので、詳しくはそちらをご覧ください。

<http://www.pragmatics.gr.jp/publication.html>

★《新刊案内》()内の解説はamazon.comその他新刊書紹介からの文章です。宣伝文は各新刊書をご覧の上内容については各自でご判断ください。

内田聖二. 2011. 『語用論の射程: 語から談話・テキストへ』 東京: 研究社, 3,675円 (関連性理論から見た語法とテキスト。語用論的

情報がかかわる言語現象を統一的に説明できる原理として注目されている関連性理論に依拠しながら、語からテキストまでの広範囲の言語現象を具体的かつ詳細に分析する。談話の構造、発話行為、ダイクシス、メタ表象といった概念を援用する一方で、伝統的な語法研究の伝統を踏まえた本書は、語用論研究の方法とその射程を実践的に明らかにしている。)

Yoshida, Etsuko (吉田悦子). 2011. *Referring Expressions in English and Japanese: Patterns of Use in Dialogue Processing* (Pragmatics & Beyond New Series 208), Amsterdam: John Benjamins (「対話することは、私たちの最も身近な伝達手段である。本書では、指示表現という言語現象に注目し、対話コミュニケーションのしくみの一端を明らかにすることを目指した。日英語の課題遂行的な自然発話データをもとに、対話の話題が共有されていく過程を計算言語学的アプローチを援用して分析し、談話的、語用論的考察を加えた。)

佐藤響子・井川壽子・鈴木芳枝他(編著). 2011.

『ことばの事実をみつめて：言語研究の理論と実証』 東京：開拓社，6,930円(千葉修司津田塾大学教授の定年退職を記念し、教え子と同僚が長年のご指導にたいする感謝をこめて執筆した論文集。日本語と英語のデータを中心に、はじめに事実ありきから出発し、言語事象の詳細な検討と理論を往復する研究スタンスを大切にした37本の論文からなる。音声学・音韻論、形態論、共時的統語論、通時的統語論、言語習得、意味論、語用論、社会言語学、英語教育と幅広い分野を網羅。)

金水敏・高山善行・衣畑智秀・岡崎友子(編集). 2011. 『シリーズ日本語史3 文法史』

東京：岩波書店，4,095円(伝統的な国学を基盤とし、西洋の文法概念が折衷された国文法。その国文法と、従来疎遠な関係にあった生成文法や、記述研究としての日本語学、近年の歴史語用論、社会言語学等の理論を包括的に踏まえ、日本語文法史を捉えようとする画期的な試み。形態論、統語論、接辞、代名詞、直示・人称指示、語用論的ルールといった観点から分析し記述する。)

ペネロピ・ブラウン スティーヴン・C. レヴィンソン著、田中典子監訳、斉藤早智子・津留崎毅・鶴田庸子・日野壽憲・山下早代子訳。2011. 『ポライトネス：言語使用における、ある普遍現象』 東京：研究社，5,250円 (Penelope Brown and Stephen Levinson. 1987.

Politeness: Some Universals in Language Usage, Cambridge: CUP の翻訳です) (「ブラウン&レヴィンソンのポライトネス理論」として知られる、ポライトネス研究の代表的な文献、待望の翻訳。ポライトネス研究は、語用論、社会言語学、談話分析など、近年ますます注目されている言語研究の諸分野において、中核となるもののひとつである。本書は、そのポライトネスに関する代表的な研究書の翻訳であり、英語のみならず日本語を研究するうえでも大いに役立つことだろう。)

マイケル・トマセロ編著、大堀寿夫・秋田喜美・古賀義顕訳。2011. 『認知・機能言語学：言語構造への10のアプローチ』 東京：研究社，5,040円(認知・機能言語学の代表的アプローチの見取り図。ラネカー、ゴールドバーグ、ヴィエルジュビツカなど新しい言語科学の世界を果敢に切り開いてきた学者たちの代表的な論文10篇を集めた論文集。日本で本格的な紹介がなかったギヴォン、クロフト、チェイフ、ホッパー、ヴァン＝ヴェイリンも収録。発達心理学、言語習得の分野で多大の業績をあげているトマセロが「マイベストCD」の感覚で編集したというオールスター論文集。各論文の冒頭に日本語版オリジナルの解題を付す。英語学、日本語学を問わず言語学関係者必読！)

吉岡泰夫. 2011. 『コミュニケーションの社会言語学』 東京：大修館書店，1,995円(病院、市役所など行政の窓口、ビジネス、学校…。さまざまな現場で直面する専門家と非専門家のあいだのコミュニケーションの壁。それを乗り越えるための方策を、社会言語学的調査をふまえ、ポライトネス理論を援用しつつ提示する。)

神田靖子・山根智恵・高木佐知子. 2011. 『オリンピックの言語学：メディアの談話分析』 岡山：大学教育出版，2,100円(本書は、オリンピックを共通テーマとして、文化的・国家的背景が、人々のオリンピックの受け止め方に影響を与え、また自国に対するそれぞれの文化固有のナショナリズムを形成するかを、広義の談話分析の観点から分析する。)

安井稔. 2011. 『20世紀新言語学は何をもたらしたか(開拓社言語・文化選書29)』 東京：開拓社，1,890円(本書は『素顔の新言語学』(1978年、研究社出版)の改訂増補版である。ことばとは何か。英語の構造はどのようになっているか。言語の普遍的特性は何か。変形生成文法の登場に伴う理論の進展とともに考察する。深い構造など、抽象的レベル間

- 題のほか、文型論など、具体的問題に及ぶ。改訂増補にあたり、今世紀初頭における回顧と展望を含む「生成文法のその後と認知文法」と最近脚光を浴びている認知文法の立場から「英語の冠詞再考」の2章が加えられた。) 鈴木孝夫研究会. 2011. 『鈴木孝夫の世界第2集 ことば・文化・自然』 東京: 富山房インターナショナル, 1,890 円 (言語学者であり稀代の思想家、鈴木孝夫氏の貴重な講演を収録すると共に、鈴木氏の研究の成果を記録する、シリーズ第2集。)
- アンナ・ヴィエルジュビツカ (著)・小原雅俊 (翻訳), 石井 哲士朗 (翻訳), 阿部 優子 (翻訳) 2011. 『アンナ先生の言語学入門』東京外国語学出版会 2,100 円(本書は、ポーランドに生まれた気鋭の言語学者アンナ・ヴェジビツカによる言語学入門書の初訳。言語学のエッセンスが余すところなくちりばめられ、世界のさまざまな言語の用例をふんだんに駆使し、言語学の基本概念と研究課題をやさしく、しかも興味深く語る。言語学の巨人・故千野栄一先生(東京外国語大学名誉教授)が、一般読者向けの言語学入門書として絶賛し、日本での翻訳出版を待望してやまなかった古典的名著。著者について 1938 年、ポーランド生まれ。オーストラリア国立大学教授(言語学)。ワルシャワ大学卒業後、モスクワ大学への留学、マサチューセッツ工科大学研究員を経て、68 年、ポーランド科学アカデミーにて博士号取得。72 年以降、オーストラリアに在住。言語学をはじめ、人類学、心理学、認知科学などさまざまな分野を横断した研究を行っている。著書に本書のほか、『キーワードによる異文化理解 英語・ロシア語・ポーランド語・日本語の場合』(而立書房、2009)、*Semantics, Culture and Cognition* (1992), *Emotions Across Languages and Cultures: Diversity and universals* (1999), *English: Meaning and Culture* (2006)などがある。)
- 安西 祐一郎. 2011. 『心と脳——認知科学入門(岩波新書) [新書]』(人間とは何か? 社会や環境の中で、何かを感じ、知り、考える心のはたらきとはどのような仕組みか? それは脳の中でどのようにできているのか? 20 世紀半ば、情報という概念を軸にして芽吹いた認知科学は、人間の思考や言語などを解き明かし、社会性や創造性の核心に迫っている。その全体像を描く、またとない入門書。)
- Korta, Kepa and Perry, John. 2011. *Critical Pragmatics: An Inquiry into Reference and Communication*, Cambridge: Cambridge University Press
- Dupret, Baudouin. 2011. *Practices of Truth : An Ethnomethodological Inquiry into Arab Contexts* (Pragmatics & Beyond New Series 214), Amsterdam: John Benjamins Pub
- Jaszczolt, Kasia M. and Allan, Keith (eds) *Saliency and Defaults in Utterance Processing* (Mouton Series in Pragmatics) , Berlin: De Gruyter
- Salgado, Elizabeth Flores .2011. *The Pragmatics of Requests and Apologies: Developmental Patterns of Mexican Students* (Pragmatics & Beyond New Series 212) , Amsterdam: John Benjamins
- Locastro, Virginia . 2011. *Pragmatics for Language Educators: A Sociolinguistic Perspective* (ESL and Applied Linguistics Professional Series), London: Routledge
- Yus, Francisco . 2011. *Cyberpragmatics: Internet-Mediated Communication in Context* (Pragmatics & Beyond New Series 213), Amsterdam: John Benjamins
- Piazza, Roberta / Bednarek, Monika / Rossi, Fabio (eds). *Telecinematic Discourse: Approaches to the Language of Films and Television Series* (Pragmatics & Beyond New Series 211), Amsterdam: John Benjamins
- Dynel, Marta (ed). 2011. *The Pragmatics of Humour Across Discourse Domains* (Pragmatics & Beyond New Series) Amsterdam: John Benjamins
- Zienkowski, Jan / Ostman, Jan-Ola / Verschueren, Jef (eds). 2011. *Discursive Pragmatics*. (Handbook of Pragmatics Highlights 8) , Amsterdam: John Benjamins
- Chapman, Siobhan. 2011. *Pragmatics* (Modern Linguistics Series), New York: Palgrave Macmillan
- Wolfram, Bublitz and Norrick, Neal R.(eds). 2011. *Foundations of Pragmatics* (Handbooks of Pragmatics Vol. 1) , Berlin: Mouton de Gruyter
- Fetzer, Anita and Oishi, Etsuko (eds). 2001. *Context and Contexts: Parts Meet Whole?* (Pragmatics & Beyond New Series 209), Amsterdam: John Benjamins
- Aijmer, Karin(ed). 2011. *Contrastive Pragmatics* (Benjamins Current Topics 30), Amsterdam: John Benjamins
- Houck, Noel R. / Tatsuki, Donna H. / Dantas-Whitney, Maria (eds). 2011. *Pragmatics: Teaching Natural Conversation*, Alexandria(VA): TESOL
- Israel, Michael. 2011. *The Grammar of Polarity : Pragmatics, Sensitivity, and the Logic of Scales* (Cambridge Studies in Linguistics 127), Cambridge: CUP
- Wang, Vincent X. 2011. *Making Requests by Chinese EFL Learners* (Pragmatics & Beyond New

- Series 207), Amsterdam: John Benjamins
- Norrick, Neal R./ Chiaro, Delia / Bell, Nancy D. (eds). 2011. *Humor in Interaction* (Pragmatics & Beyond New Series), Amsterdam: John Benjamins
- Antaki, Charles. 2011. *Applied Conversation Analysis: Intervention and Change in Institutional Talk* (Palgrave Advances) Palgrave Macmillan
- Ostman, Jan-Ola、Jef Verschueren. 2011. *Pragmatics in Practice* (Handbook of Pragmatics Highlights) Amsterdam: John Benjamins.

と許諾を得て公開しているのかなあ」と心配になることもあります。自分が聞けなかった発表が聞けるのは大変ありがたいものです。もっとも、こういうことをみんながやり始めると、発表会場にはカメラだけがあるという状況になり、会員が会場に足を運んでくれなくなったら困るなあと気をもんでおります。

(Newsletter担当：加藤重広記)

(記事追加：田中廣明)

☆☆☆☆☆☆

《編集後記》

テクノロジーの進歩は予想しない結果をもたらすことがあります。携帯電話が普及して遅刻が増えたという話を聞きます。遅れても、連絡ができるので、苦勞せずに目的の場所に行ったり、相手に会ったりできるからでしょう。これは、時間厳守の行動規範から解放されたとも言えますが、だらしなくなったとも言えるでしょう。

携帯電話のない昔、といっても個人的にはそれほど昔という感じはしないのですが、かつては遅刻すると会えなかったり合流できなかったりする可能性が高かったので、安易に遅刻するわけには行きませんでした。駅には必ずあった伝言板も最近は見かけなくなりました。確かに、メールがあれば伝言板は要らないのですが、牧歌的な感じさえするあの時代が懐かしく思い出されます。

近年、学会発表でパワーポイントなどを用いたプレゼンテーションは珍しくありませんが、事前に印刷して配布するハンドアウトの類と違い、直前まで修正が可能なので、ぎりぎりまで準備がずれこむケースも多いようです。最近、教員から院生までみんな多忙を極めていて、時間がない状況で準備をするので、だらしなないといつて非難することはできないのですが、どうもテクノロジーの発達で便利になるどころか、逆にいつでもどこでも仕事ができる状況が現出し、その結果、常に課題や業務に追い立てられているような感さえあります。

また、動画の撮影や公開が容易になっていることもあって、自分の学会発表を撮影して個人で公開する例も見かけます。発表者以外で写っている質問やコメントの方、司会やスタッフなども相応の肖像権はあるはずなので、「ちゃん